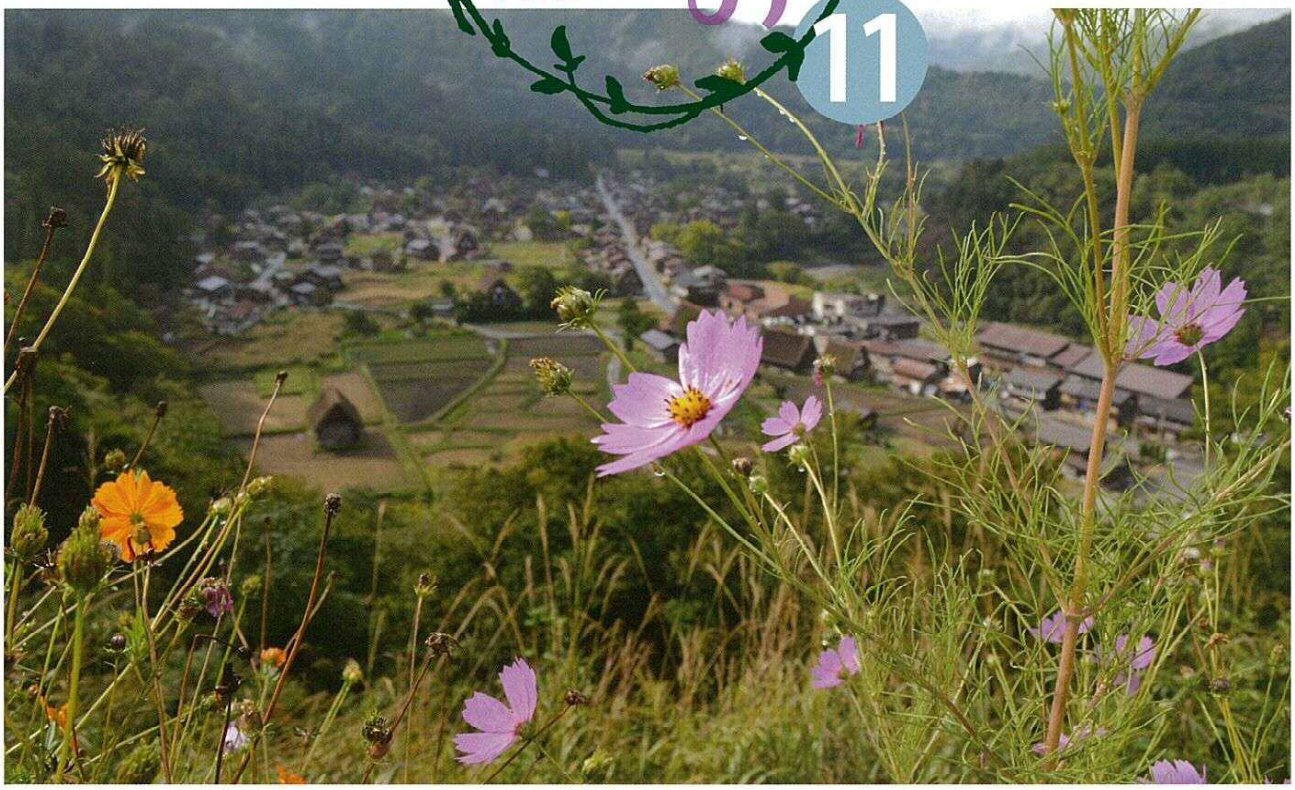
南無阿弥陀仏は
私のいのち

えこお
平成24年
11月号
NO.
418
11

〒110-0012 東京都台東区竜泉 1-20-19
発行所 真宗 佛光寺派 西徳寺
TEL 03-3875-3351 FAX 03-3875-6796
http://saitokuji.tobiiro.jp/
発行人 岸本 秀一
印 刷 日生印刷(株) 03-6863-3263



つながり

あの三月十一日の東日本大震災から「絆」とか「繋がり」という言葉に出会うことが多くなった。人は一人では生きられない。こんな当たり前のことが、声高に叫ばれる。共同体としての人の営みが希薄化したからであろうか。それともこの大災害を目の当たりにして、何とかしなければという思いからであろうか。

一方、今「つながり」に苦しみ、病気としての治療が必要になってきているとの報道があった。スマートフォンという携帯やモバイルを通して行われるソーシャル・ネットワークと呼ばれる、インターネット上の「つながり」を利用している人の一割に治療が必要であるという。依存症である。

無量寿経は「人、世間愛欲の中に在りて、独り生じ独り死し、独り去り独り来る」と言い「代わる者有ること無し」と説く。人間の事実を押さえ、本来のつながりを促している。同じく経には「去来進止(こらいしんし)、情に係(か)くる所無し。意に随いて自在」と、浄土に生まれる徳を説く。

西徳寺は今月上旬「報恩講」を迎える。そして下旬にはご本山の「御正忌報恩講」を迎える。親鸞聖人のご命日である。聖人の眼を通し、経文を通して、わが身に出会い、共につながりを生きる人々に出会っていくのである。当たり前とも言えるし、かけがえのないとも言えるこの世を暮らしていく。

群生海

うちはうちなりに

台東区在住　神尾（かみお） 定治（さだじ） さん

今回は台東区竜泉にあるお寿司屋さん、魚誠の神尾定治さんにお話を伺います。

◆母の勧め

うちは私で三代目になります。昭和二年からですから、八十五年間ずっとこの場所で店をやってるんです。息子が私だけでしたし、母からは、「あなたはサラリーマンには向いてない」と、中学生の時からずっと言われていました。そうなると、「俺しかいない」ってなってきたんです。昔からの親の勧めに従順（したが）ったということですね。

◆父の背中

うちの父は無口で、二十歳ぐらいまで会話がほとんどなかったんです。それもあって、仕事を教えてもらうというよりも見る。父の背中を見て覚えましたね。仕事中に父親からはああしろ、こうしろとは言われなかったです。仕込みをモタモタしていたら、「いいからどけ」と、よく言われていましたね。

始めて十年ぐらいして、横で握っていても何も言われなくなりました。だからある程度は認めてもらったんでしょうね。今でも味のチェックは入りますけれども。

◆時代の流れ

最近は回転寿司が人気みたいですけれども、それは時代の流れですよね。みんな跡を継いでいる人は大変な時代じゃないでしょうか。でも、うちみたいに長くやってる店は、長くやっている程、新しいものを考えているんです。もちろん、うちは寿司が基本にありますが、宴会の時とかに寿司以外の新しい物も試してみるんです。失敗作ももちろんありますけれど、お客さんの好みも分かって、勉強になります。

◆制限速度内でゆっくりと

最近は、お金をより稼ぐことが成功なんだ、という風潮がありますよね。去年の震災以降、近所の会社も厳しいみたいで、うちも正直言って大変です。

欲を出さなければいけないのかもしれないんですけれど、私は他の店と競うんじゃなくて、お客さんの方を向きながら、マイペースに制限速度で走っていきたいなと思いますね。

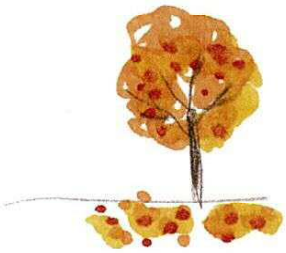
（聞き手　仲井 真裕）

なんで？ 12 「線香」

仏法を象る荘厳（かたど しょうごん）の一つとして香（こう）が使われますが、その起源はインドで遺体の死臭を消すためといわれています。その中でも香の材料を細かくして練り合わせ、細い棒状に成型して乾燥させたものを線香と呼びます。日本への伝来時期ははっきりしていませんが、江戸時代以降に一般的に用いられるようになったといわれています。

線香は香炉の直径に応じて適当に折り、火をつけて使用します。本数に決まりはありませんが、真宗では伝統作法として線香を横に寝かせて使います。火の扱いには十分注意してご使用ください。

（高橋 淳 記）



正信偈（しょうしんげ）の話⑮

松井憲一

成等覚証大涅槃　必至滅度願成就

（等覚を成り、大涅槃を証することは、必至滅度の願成就なり。）

人間の側からしか発想しないわれらは、「さざえから見れば壺焼き生き地獄」といわれて、自分のおろかさに一瞬ひるんでも、ご縁があれば肝臓を鍛えるために酒を飲むと、へりくつをいう生活を繰り返しています。そのような煩悩のかたまりであるわれらを、すべて平等に救わんと呼びかけられたのが、「本願名号正定業」お念仏もうせという教えでありました。そして、その教えが響いて、自分をよしとする思いをひるがえして念仏もうさんとおもいたったのが、「至心信楽の願」を因（もと）にした信心でありました。そのお念仏の信心によって、誕生するのが、「等覚を成り、大涅槃を証する」という覚りであります。

「覚り」というと、われらには、手の届かない賢明な内容のように思いますが、釈尊が覚られた初一念は、無明（決して晴れることのない闇の自分）の発見でありました。苦悩の原因が外にあるのでなく、自己の無明にあると気づくのは、妄念妄想が破れたからです。釈尊のお覚りの坐像は、結跏趺坐して、右の手の指が大地に接地したお姿（降魔接地印）です。その内面は「私はかって牛であった、私はかって草であった、私はかって大地であった」といわれるように、瞑想も、六年の苦行も、苦行の決別も、すべて大地に支えられてのことであったと、五体投地して出遇った、天地いっぱいの豊かな感動を表すのです。

南無阿弥陀仏に開かれる信心は、「本願を信受するは、前念命終なり。即得往生は、後念即生なり。（『愚禿鈔』）」といわれるように、私の思いに死んで私の事実に生きる回心ですから、自力の修行を尽くして、覚るのと同じ位をいただくといわれます。だから、「念仏往生の願により 等正覚にいたるひとすなわち弥勒におなじくて 大般涅槃をさとるべし（『正像末和讃』）」と讃嘆されます。つまり、念仏往生の願（至心信楽の願）によって、凡夫のわれらが信心の因を得れば、つねに信の一念にたって今を前念命終と歩むから、等覚（さとり）にいたり、未来仏といわれる弥勒菩薩とおなじ位について、大涅槃すなわち完全燃焼させていただけるといわれます。こうして、念仏往生の願に信心を恵まれたものは、「必至滅度の願」によって、「等覚を成り、大涅槃を証することは、必至滅度の願成就なり。」という果をいただくのであります。

それで、親鸞聖人は、『「成等覚証大涅槃」というは、成等覚というは、正定聚のくらいなり。このくらいを龍樹菩薩は、「即時入必定」とのたまえり。曇鸞和尚は、「入正定之数」とおしえたまえり。これはすなわち、弥勒のくらいとひとしとなり。証大涅槃ともうすは、「必至滅度の願成就」のゆえに、かならず大般涅槃をさとるとしるべし。滅度ともうすは、大涅槃なり。（『尊号真像銘文』）』と、現生に正定聚（成仏を確定したともがら）の位にいることを喜ばれます。

われらは、この世に生きる限り、煩悩はなくなりませんから滅度したとはいえませんが、本願のはたらきで必ず滅度に至る確信をえて、身をあげて聞法し念仏する生涯を賜るのです。それで、曽我量深先生は、「往生は心にあり、成仏は身にあり」といわれ、さらに「往生は、心にあるがゆえに、現生に即得し、成仏は、身にあるがゆえに、来生に超証する」といわれました。

山門の言葉

三病（謗大乗・五逆罪・一闡提）世の中に極重なり。

近年、新聞やテレビで取り上げられる話題の中で、「心の病気」という言葉をよく耳にする。

病気と聞くと、どうしても身体に起きる様々な症状のものだけを想像する。胃腸が悪くなれば内科へ、目が悪くなれば眼科へ行き治療してもらうような、いわゆる一般的な病気である。

しかし、症状や見た目には分からないようなものであれば厄介だ。その中の一つが「心の病気」と言われるものではないだろうか。私達が自覚出来る病気は治す方法があるかもしれないが、自覚症状の無い病気であれば、その病気にも気がつかず病院にも行かない。自分の心を疑うような人はいないだけに、根が深い問題である。

三病（謗大乗・五逆罪・一闡提）とは、まさに私達が、気がつかずにいる病気の事を教えて下さっている。人間が生まれながらにして持ち合わせている病気であり、全くその事に気がつかずに生きているというのである。

私達は、自分の心や思いを中心にして、何事も自分の思いに合うようなものを選び取ってきた。私の思いに合わないものは簡単に排除し、そして新たに合うものを求めていくという在り方の繰り返しではないか。治らない病気を抱えているとは、この事であろう。どこまでも自分の心に執着し、自分の心を疑わないという痛ましい在り方をしている。このような在り方に、残酷さをも感じる。

親鸞聖人はこのような私達を、凡夫や凡愚、更には罪悪というような言葉でも言い表しておられるが、個人的に見出されたのではなく、師や友との出遇いによって教えられてきた事である。個人では、どうにもならない身をいただいている事に気づかされ、自分の心に依るのではなく、その身を悲しんで下さっている願いに耳を傾け、それに依っていく事を勧められていると感じている。

（大橋　伊知郎　記）

おつとめ　経典②

経典の構成は大きく分けて序分（序となる部分）、正宗分（本分）、流通分（後の世に伝えていく部分）の三つから成り立っています。

序分の始め（証信序）は六つの事柄（六事成就）から成り立っています。その内容は釈尊が何時、何処で、誰に対して説かれたのかが記され、その教えを「私は釈尊のお言葉をこのように受け止めています」と、聞いた人の頷きが語られているのです。

経典の冒頭にある「我聞如是」ということは、受け取った人がいるということです。釈尊がどれほど教えを説かれたとしても、それに頷く人がいなければ独り言に過ぎません。釈尊の言葉が真実の法であるということは、その教えによって我が身に目覚め、確かな依りどころとして人生を歩まれた人々によって証明されています。

（木村　専正　記）

掲示板 平成24年11月

3日(土)・4日(日)　**報恩講　両日布教使**
福嶋 崇雄師

7日(水)・8日(木)　**婦人会一泊旅行**
(西伊豆・大沢温泉)

10日(土)　午後3時半　**混声合唱団「エコー」練習**
午後6時　**同行会「正信偈の教え」に聞く**
法話　高橋 淳

11日(日)　午後2時　**城西ブロック会聞法会**
(中野商工会館)

17日(土)　午後1時半　**定例聞法会**

18日(日)　午後2時　**城北ブロック会聞法会**
(大塚 大和田)

20日(火)　午後7時　**仏教青年会報恩講**
講師　玉出 宗順師

22日(木)　午後1時半　**教行信証『信巻』に聞く(第83回)**
講師　宗 正元師

24日(土)　午後3時半　**混声合唱団「エコー」練習**
午後6時　**同行会「正信偈の教え」に聞く**
法話　蓮井 邦宗

えこお志お礼

ご浄財を頂戴いたしましてありがとうございます。
ご芳名の掲載をもってお礼とさせて頂きます。

滋賀県	榮勝寺 様
栃木県	斉藤 吉郎 様
松戸市	渡邉 茂 様
板橋区	木下 好江 様
武蔵野市	津田 直子 様

日誌

9月18日	教行信証「信巻」に聞く(第81回) 講師　宗 正元師
9月19日～25日	秋季彼岸会
9月21日	秋季永代経法要 法話　岸本住職　蓮井 邦宗
9月27日・28日	宗祖忌
9月28日	東京教区研修会(新横浜)
10月6日	混声合唱団「エコー」練習
10月7日	中央ブロック会総会・聞法会 (西徳寺　参加者23名)
10月7日・8日	中興忌
10月13日～19日	岸本住職　新潟二組　差向布教　派出
10月13日	同行会「正信偈の教え」に聞く 法話　山崎 哲

お墓のはなし 「法名刻み」

お身内が亡くなられた場合、墓石に「法名(ほうみょう)・俗名・往生年月日・行年」(真宗では戒名ではなく法名という)を刻みます。強制ではございませんので、ご希望の方は寺務所にてお申し込み下さい。

法名刻みは竿石(さおいし)を持ち帰り刻む方法を取っており、期間は凡そ一ヶ月を見ていただきます。ですから納骨法要や一周忌法要などと重ならないように調整する必要があります。また、墓石が古く破損する可能性がある場合は刻めないこともございますので、御了承下さい。

料金ですが、院号法名の場合は税込みで三一、五〇〇円、通常法名で二九、四〇〇円となっております。

西徳寺での墓石に関する全ては「阿部石材」が請け負っております。お時間を調整し、立ち会いながらの御相談も出来ますのでご希望の方はご連絡下さい。

また、知人の石材屋さんに建立や法名刻み等を依頼したいという方につきましては、寺務所にご連絡下さい。

(山崎 哲 記)